
トリップでJump！

春野キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリップでJump!

【Nコード】

N4256S

【作者名】

春野キリ

【あらすじ】

“ 時空の穴 ”

世界と世界を繋げるもので、その穴に違う世界の二人が、ウェイアードという異世界へと落ちてしまった!?

(* 友情出演あり)

トリップ前に

ブログ『春焰』に掲載中『星空』と、『NARUTO』&『D・Gray-man』のコラボ！

<設定>

- ・主人公は、ユリハ。
- ・アレス達とは仲直りし、今はウェイアードにいる。
- ・ハイディア村にある、ジンという精霊の住んでいる家に暮らしている。
- ・『星空』にトリップ。
- ・最初は、ナルトとアレンの二人だけ。
- ・3つの世界の時間帯は同じ。
- ・友情出演で、『天空学園』
- ・特撮の変身シーンあり。
- ・もしかすると、『四神伝+α』なども出る事も。

エピソード1 カの不安定（前書き）

星空とNARUTOとD灰のトリプルコラボ！
所々混じるところは、ぶっ飛ばすぜ！

では、スタート！！

エピソード1 力の不安定

——ウェイアード。

エナジストという、エナジーを使いし者達が存在する世界。

以前、まったく違う世界からエナジストがやってきて、エレメンタルそのものを変えようとした——

“エレメンタル事変”が起こった。

彼らを止めるべく、同じ世界からやってきた全のエナジストであるユリハは『ハイディア戦士』と呼ばれる者とともに、くい止めたのだ……

~~~~~

ハイディア村。

滝下付近に植えられている花壇に、二人の人影があった。

「アクア！」

「かけ過ぎだ！」

「……あつ」

花壇が水溜り状態になり、水のエナジーを使った少女に青年が怒鳴っていた。

少女の名は、ユリハ。

異世界から来た全てのエナジーを使える、全のエナジスト。青年の名は、ロビン。

『ハイディア戦士』の一人で、地のエナジスト。

“エレメンタル事変”で、ウェイアードを救った二人である。

「あるえ〜？」

「ぼけるなよっ」

「でもねー……」

不満を抱きながら、ユリハは自分の手を見つめる。

ユリハはエナジーとは別の力“オルクラト”を持っていた。

オルクラトは物とエナジーを錬金する力で、またエナジーを無効する能力もある。

昔はオルクラト使いが存在していたが、現在はユリハだけであった。

「なんか、制御できなくて」

「そうなのか？」

「うーん。私、詳しくは分からないから……」

“エレメンタル事変”で、彼女は自分のエナジーとオルクラトを使い、元凶であるレギスデュラハンを倒した。

その直後、ユリハは2つの力を使いすぎて、身体が消滅してしまった。

だが、それは回復するために必要な事であった。その後は、友人達とウェイアードのハイディア村という所に暮らしている。

ただ最近、ユリハの力が不安定になっていた。

「でも、エナジーを使ったら、オルクラトが弱くなって」

「オルクラトを使ったら、エナジーが弱くなってる？」

「ううん。一時使えなかった」

ユリハの言葉に、ロビンはあ！？と驚いてしまった。

時折勝負を挑んでいるのだが、彼はユリハに戦おうとした時、「調子が悪いから」と却下された事を思い出す。

「じゃあ…」

「うん。ちょっとオルクラトを使って、エナジーが出なかった」

「そうか」

「なんか、力の安定ができないみたいで……」

（気にする事はない）

「ジオス？」

（エナジストであるお前には、オルクラトは扱いにくいだけだ）

ユリハには、別の人格が存在している。

ジオスという、オルクラト使いの男である。

彼はユリハの先祖にあたり、友を殺した事があるという。

「でも、前は使えたけど？」

（それは私がすこし手伝ったのだ。今お前が使っているオルクラトは、お前だけの力だ）

「……あるえー」

「ジオスと話していたのか」

ユリハは首を傾げながら、ジオスが言った事をロビンに話した。  
大変だなー、と腕を組み合わせて彼女に告げた。

「ユリハだけのオルクラトか」

「それだと思う」

「力の制御がか？」

「自分のオルクラトが存在したなんて、ジオスが言うまで気付かな

かったからさ」

オルクラトは、まったく新しいエネルギーだけでなく物質までも作る。

ただし、自分のエネルギーを天秤に乗せ、同じ量にしないといけないのだ。

ユリハの場合、自分だけのオルクラスを知らなかったためにエネルギーとの分量に差ができ、片方が使えなくなってしまうという状況になった。

そのため、弱くエネルギーを使おうとしても、制御が出来なくなっ  
たために強くなってしまう。

「うーん、まいったなあ」

「まあ、ゆっくり自分の力を見た方がいいだろう」

「そうだね」

「あ——！」

と、その時。

はきはきとした声が響き、ユリハとロビンは土で出来た階段の方に目を向けた。

淡い赤の服を着た少女が、階段の真ん中辺りから飛び降りだした。あぶなっとな人はつい思ったが、無事に着地した少女は近寄ってきた。

「二人とも、みっけ！」

「どうした、メトナ」

少女、メトナはユリハと同じ世界で火のエンジスト。

彼女は先にウェイアードにやってきて、友達であるユリハと戦った一人であった。

「スクレータさんが話があって、皆スクレータさんの家に集まってるの！ もう後は、ユリハとロビンだけだよ！」

「スクレータが？」

「早く行こうよ！」

「あわわっ。せかさないでよ、メトナ！」

「おい、待てよ！」

ユリハの腕を掴み、メトナは引っ張りだして歩き出した。  
慌ててロビンも、二人の後を追いかけていった。

## エピソード1 カの不安定（後書き）

一話でした。

いきなりトリップは無理なので……  
三話あたりでやろうと思ってます。

黄金の太陽は、少しだけやった事がありますがクリアした事がありません。

はい、少しオリジナルが入りますっ。

次は、キャストが多くなる、可能性大です。

## エピソード2 時空の穴（前書き）

ユリハ「ユリハと！」

ロビン「ロビンの！」

ユリハ・ロビン「初心者でもやさしいあらすじ劇場！！」

アレス「おかしいだろ！」

ジェラルド「ツツコミ入れたら負けだぞ！」

ウォル「どうしてですか」

アスレル「なー。嫉妬してる奴がいんだけどよ？」

シバ「無視よ」

ユリハ「“エレメンタル事変”後。エナジーで花壇に水をやるつもりしたら、水溜りになった！」

ロビン「原因は、ユリハだけのオルクラト」

ユリハ「その時、メトナがやってきて、スクレータの家に向かう」

ロビン「話があると、言っていたが……」

ユリハ「初心者でもわかりやすいあらすじでした！」

ロビン「要点だけ取ればいいからな！」

## エピソード2 時空の穴

ユリハとロビンはメトナに連れられ、村外れにある小屋へと向かっていた。

そこには、スクレータという錬金術学者が住んでいる。

「ロビン」

メトナの後ろを歩きながら、ユリハは友達に聞こえないように隣にいるロビンに話しかけた。

「どうした」

「お願い……私が力を制御できない事、黙っててくれない？」

なんでだ？ と尋ねようと思ったが、彼女の周りにいる友達を思い出す。

密着というか執着というか、どちらを選んでも同じな青年。

鋭い観察力を持っている青年。

その次に備わっている少女。

風のエナジストだけが使えるエナジー“リード”を持つ少年。

何を考えているか分からない青年。

ユリハと一緒にいる双子のような少年少女。

「……分かった。口を固くしておく」

「心もお願い」

「二人ともどうしたの？」

振り返ってきたメトナに、ユリハとロビンは「なんでもないっ」

と苦笑いをした。

「「（“リード”には気をつけておこつ……）」  
（はぁ……）」

~~~~~

スクレータの家に着くと、メトナが扉を開け先に入った。

「ユリハとロビン、連れて来たよ」

二人も中に入ると、テーブルの周りにいる人達の目が彼女等に向かう。

「何をしてたのー？」

「また勝負してたんだろ？」

尋ねてきた少女は、アビスという地の召喚士。

メトナと同じ、ユリハの友達で先にウェイアードにやってきた一人。

もう一人は、ジェラルドという火のエナジスト。

『ハイディア戦士』の一人で、ロビンとは同じ村の出身。

「水やってたよ」

「水……滝近くの花壇にですか？」

光のエナジスト・レナが問うと、ユリハがコクリと頷いた。

彼女の隣にいる空間のエナジスト・アレスの頭に、闇のエナジス

ト・アスレルが本を一冊ずつ載せていた。

3人も、この世界に先にやってきたユリハの友達である。

「動くなよー」

「……」

「血管が出てますよ」

と、風のエナジスト・ウォルが冷たくアスレルに告げた。

「それなら、俺がやるべきだろ」

氷のエナジスト・グレンが言うと、ユリハはえっと目を泳がせてしまった。

「い、いや…… ロビンに頼まれた時、グレンいなかったでしょ？」

「まあ……」

「ロビンが急いでいたから、私も水のエナジー使えるしっ」

「そ、そうだ。最初お前に頼もうとしたら、ユリハだけしかいなかったからっ」

ユリハの話に合わせ、ロビンも告げてきた。

実というと、花壇にいつも使っていたじょうろが壊れ、ロビンが修理を頼もうとユリハの所に行ったのだ。が、オルクラスとの制御ができなかったので、水のエナジーで対応した。

「確か、じょうろがあったはずですが？」

「「（ギクッ）」」

「いいじゃん。どっちでやっても」

「スクじい、さっさと話してくれよ」

レナが尋ねようとしたが、火のエナジスト・ジャスミンと地の召喚士・ガイアが痺れを切らし中断させた。

ジャスミンは『ハイディア戦士』の一人で、ロビンとジェラルドとは幼馴染。

ガイアはユリハの友達で、グレンとウォルと同様、アレス達この世界にやってきたのだ。

「そうじゃのう」

スクレータが頷くと、ユリハとロビンは空いている椅子に座った。心の中で、ガイアとジャスミンに感謝をしながら。

「で、話って？」

「実はのう、ほんの片付けをしておったら、興味深いものを見つけたんじゃよ」

と言って、スクレータは一冊の本をテーブルの上に乗せた。そして、ユリハ達の目はその本に集中させられた。

「その本には、“時空の穴”というのが書かれておるのじゃ」

“時空の穴”？」

「それは、ぼく達がこちらに来た階段と似ているのですか？」

ユリハが復唱し、ウォルがスクレータに尋ねた。

「似ているのは似ておるのじゃが。“時空の穴”は何時何処で現れるのかは、まだ検討できておらんのだ」

「じゃあ。突然現れる事も？」

「そうじゃのう」

本に手を伸ばしたメトナが聞くと、スクレータはゆっくりと頷かせた。

「もしかすると、ユリハ達とは違う世界の者達が繰るかもしれん
う」

「へえ」

「会ってみたいなあ」

「そうだね！」

メトナは感心し、興味を抱いたジャスミンにアビスが賛同した。

「あのなっ」

「それってよ。おれ等が落ちる可能性もあるんじゃないやね？」

8冊目の本をアレスの頭に乘せながら、アスレルが素朴な疑問を告げる。

「そりゃそうだよな」

「落ちたら、いつ現れるか分からないし」

「それに現れたとしても、元の世界とは限らないだろうな」

ジェラルド・ロビン・グレンが、アスレルの疑問に意見を言った。
でも、とユリハが笑みを浮かばせてこう告げてきた。

「元の世界じゃなくても、いろんな人に出会える。それもいいんじゃないかな？」

「そうですね」

と、レナも微笑んで賛成した。

元の世界に戻るまで、旅になるのだから。

その時。

10冊目を乗せようとした瞬間、アレスが立ち上がったのだ。
その拍子に、本が床へと流れ落ちていく。

「あー。せっかく10冊いったのに」

「お前は……！」

「落ち着けて、アレス！」

アスレルに掴みかかろうとするアレスを、ガイアが後ろから抑える。

その様子を見て、ユリハは軽いため息をついた。

その数日後に、思いもない出来事が起こる事を知らずに――

エピソード2 時空の穴（後書き）

二話でしたー。

実というと、何人かいません。

それは後々に、本編で出せたらいいなあ……

次回は、ユリハがある人物達と出会います！

エピソード3 出会う三人（前書き）

ナルト・アレン「初心者にでも優しいあらずじ劇場ー！」

ユリハ・ロビン「先に言われたああああー！！」

アレス「貴様等…ッ！」

ピカード「とうとう登場なんですか」

ガイア「なんか、やっと進めるって感じだなっ」

レナ「ですが。今回出るのは、ユリハと私達の世界に落ちてきた二人だけですよ？」

アレン「メトナさんに連れられ、ユリハとロビンさんはスクレータさんの家に行きました」

ナルト「そこには、ユリハの仲間が座っていたってばよ！」

ユリハ「そして、スクレータから“時空の穴”について聞かされる」

ロビン「今回は、それから数日後の話だ」

エピソード3 出会う三人

とある別々の、二つの世界。

「遅刻つてばよー!」

金髪の少年は、任務があるため集合場所に急いで向かっている最中。

「今日は何を食べましょうか。キムキャンピー」

白銀色の髪をした少年は、傍に飛んでいるゴーレムに話しかけながら食堂に歩いている最中。

その先に、黒い穴があることを知らずに――

~~~~~

スクレータから“時空の穴”の話を聞いて、数日。

「えっと、レナから頼まれた物は全部かな」

ユリハは片手に荷物を持ちながら、友の待つ家へ向かっていた。

「（とりあえず、力の事は気付かれていないからいいけど……）」

あれから、ユリハはエナジーとオルクラトの使い方を研究していた。

秘密を持たせてしまったロビンも一緒に考えてくれてもらっているが、ジオスの話だと最終的に自分の意思で出せるようにしないといけないらしい。

ロビン等はハイディアの戦士として名が高い。それゆえに他の所から依頼が来る事がある。

ユリハは、時間がある時だけでいいとロビンに告げた。

最初断ってきたが、エナジーで脅し黙らせた。その間、オルクラトが不安定となったのは言うまでもない。

「形、とかに例えてみようかな……」

川辺の傍をユリハはぶつぶつと呟き歩いていた。

——と、その時だ。

「「うわああああっ!!」」

「??」

突然空から声が聞こえ、ユリハはサッと見上げる。

青い空から、二人の少年がまっすぐこちらの方に降下していた。

「てーん!？」

ユリハは驚き、どうすればいいのかとアタフタとなってしまう。

だが戸惑っている内に、少年達は彼女が道筋としていた川辺へと落ちてしまった……

「……………あるえく?……」

可笑しな誤魔化し方をし、ユリハはゆっくりと川辺の方に視線を向けた。

落ちてきた二人の少年は、水しぶきを浴びて座り込んでいた。

「痛いってばよ」

「どこですか、ここは？」

「……あら？」

白銀髪の少年の言葉に、ユリハは首を傾げてしまう。

よく観察してみると、二人の着ている服装がまったく別物。もちろん、ユリハの知らない物でもあった。

「えっと……大丈夫？」

ユリハが声をかけると、彼らはユリハの存在に気付いた。まだ頭の中が混乱状態のままだが。

「え、ええ……」

「足が痛いつてばよー」

「ちよっと待ってて」

金髪の少年が足を押さえているのを見て、ユリハは持っていた荷物を少し離れた場所に置く。

水辺に入り、少年の前にしゃがみ込んで痛んでいるであろう足に手を添える。

「——アクア・リース」

水色の気がユリハの手に現れ、そのまま少年の足へと向かい包み込む。

ゆっくりと消えていくと、少年は足の痛みを感じてないように立ち上がった。

「痛くないってばよ！」

「よかった」

ユリハは微笑むが、反面少し困ってしまう。  
アクア・リースはオルクラトの力で、今使ったので自信のエナジーが一時使えなくなってしまったのだ。

「そっちの君はどこか怪我とかしてない？」

「いえ、大丈夫です」

と言って、白銀髪の少年はその場に立ち上がる。

ユリハも立つと、二人の顔を交互に見つめて苦笑いをした。

「えっと。まずはどこから話した方がいい？」

「まあ……とりあえず、名前を覚えてもらいませんか？」

「私はユリハっていうの」

「僕は、アレン・ウォーカーといいます」

「うずまきナルトだってばよ！」

白銀髪の少年、アレン・ウォーカーと金髪の少年、うずまきナルトに、ユリハはよろしく！ と笑顔で告げた。

「二人って、どうして空から落ちてきたの？」

「分からないってばよ」

「僕も同じですねえ……そういえば、穴に落ちたような感覚がありました」

アレンの言葉に、俺も！ とナルトが反応して言うてきた。  
穴というキーワードに、ユリハはもしかして……と思い当たる説  
を見つけてしまう。

それは前に、スクレータが話していた物——“時空の穴”。

「あー、うん。もしかしたら、二人とも同じ物に落ちたのかもしれないっ」

「何か知っているのですか!？」

「まあ……とりあえず、これだけは言うておくね。」

ここはアレン君とナルト君がいた世界じゃないよ。ウェイアード  
という世界なんだよ」

ユリハの爆発宣言に、二人は目を見開いてしまう。  
確かに自分達の知っている風景ではないのは分かるが、はっきり  
と言われるとさらに混乱してしまう。

「うちに来ない？ このままだと風邪引いちゃうし」

「分かったってばよ」

「分かりました」

水辺から上がり、置いていた荷物を抱え、ユリハは異世界からや  
つてきてしまった二人を連れて歩き出したのだった。

### エピソード3 出会う三人（後書き）

三話でしたー！

やっと主役の三人が出会いました。  
1ヶ月ぶりにつてつ。

< 技紹介 >

『アクア・リリース』

水のオルクラト。

水の気を集め、回復させる。

対は、水のエネルギー・プライである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4256s/>

---

トリップでJump！

2011年10月8日23時13分発行